

## 高齢脊髄障がいの方に対するパソコン操作支援

近年の脊髄損傷患者は「高齢者」の「不全頸髄損傷」が多くなってきている傾向にあります。これには国内における高齢者の増加や、筋力低下などによる転倒が多くなっていることが背景として考えられます。当病院においても60代以上の不全四肢麻痺患者の方が多くなっており、このような患者さんへの支援が今後重要になってきます。

患者さんの中には仕事を定年退職された方、受傷を機に退職された方が多く、退院後は時間の余裕が比較的多い方や、主に在宅で過ごされる方が多くいらっしゃいます。職能科では、そのような高齢の脊髄損傷者や病気などによる脊髄障がいの方に対して、退院後を想定した余暇・趣味的活動支援も行っています。

IT技術の進歩とともに家庭におけるパソコン普及率の上昇し、在宅でも様々な情報を得やすくなりました。脊髄障がいの方にとってパソコン操作によって活動時間を延ばすこと、また、主に上肢の運動につながるメリットも考えられます。

そうしたことから、訓練の内容としては、パソコンを使用したものが多くなっています。元々の趣味だった囲碁のゲームをやってみたり、友人に送る手紙やハガキをイラスト付きで編集してみたり、趣味の旅行や園芸に関する情報をインターネットで閲覧してみたり…ご本人の希望を伺いながら、様々な内容で訓練を行います。中には「今までパソコンなんて触ったことがありません」とおっしゃる方もいらっしゃいますが、パソコンを実際に利用してみると新たな発見につながることも多いようです。

パソコン利用の経験がないことはもちろん、受傷のために思うように手足を動かすことが難しい方にも作業していただくために、入力用デバイスの作製や提案、デスクなどの環境調整などのお手伝いをしています。そのため理学療法科や作業療法科、リハビリテーション工学科などリハ各科とも連携しながら支援を行っています。

また、退院後に継続してパソコンを活用していただくためには、地域のパソコンボランティアや支援機関の方々とも連携が必要になってきます。訓練の内容や退院後の継続した支援を今後更に充実させていきたいと思っております。

(植西 佑香里)



写真1 PC作品作製



写真2 入力デバイス

# 就労支援 ～復職を目指す方への支援～ 支援者の視点

当職能科では復職を目指してリハビリに励まれている方が1日に20～30名位は利用されています。その中で就労支援担当者が心がけているポイントをいくつかご紹介します。今回はご本人に身に着けておいて頂きたい事を取り上げてみます。

- ① 生活リズムが安定し、働くことのできる力がついていること ⇒ 通勤し勤務時間内働くことのできる体力と精神力が必要です。
- ② 休職前のご自身との違いの理解が出来ていること ⇒ 多くの方が身体面、高次脳機能面での後遺障がいを抱えての復職になります。ご本人自身が苦手になっている点を認識し、周囲にどんな配慮をして欲しいかを説明出来ると良いですね。

以上に加えて復職される皆様にお伝えしていることは、「復職日」は「ゴール」ではなく「スタートの日」ということです。安定した就労生活を維持し継続していくことがリハビリの目的であり、私たち支援者も目指すところです。従って、こちらからは…「これからが始まりですよね」…とお伝えしています。復職後に問題がなければ私たちのことは忘れて頂いてOK、但し、何か困った時にはすぐに思い出し、利用して下さい。お一人で抱え込まずに・・・

(千葉 純子)

## 平成26年度就労支援の実績

職場内リハビリテーション実施人数	
2014年4月～ 2015年2月の累計	10名

就職・復職者の人数		
2014年4月～ 2015年2月の累計	新規就労	12名
	復職	28名

## 「きくきくドリル」の活用

高次脳機能障がいの認識へのアプローチ方法の1つとして活用している「きくきくドリル」をご紹介します。

「きくきくドリル」はCDから流れる話と質問を聞いて解答する課題で、4～7歳の子供を対象として作成されており、主に聴覚情報に対する理解力や対応力の訓練を目的として、年齢ごとにレベルが設定されています。内容は約2～4分の物語を聞いて記憶し質問に答える課題や、話を聞きながら取ったメモを基に質問に答える課題などがあり、レベルが上がるごとに話のスピードが増し、情報量が多くなるなど、難易度が上がります。これは子供向けの課題ではありますが、特に記憶障がいや注意障がいのある方に実施すると、ご本人の予想以上に解答できずミスが出る、という状況となり「話は聞いていたけど、あまり覚えられなかった」「周囲にいる人の動きが気になって、話が聞けていない所があった」などの感想が出る場合があります。このような感想をきっかけとして、障がいへの気づきと代償手段に関するアプローチを行っています。(安藤 優美子)



写真3 きくきくドリル